

神奈川県知事賞

「七人の神様」

厚木市立玉川中学校
1年 加藤 美紗希

「一粒も残さず食べなさい。お米が残っているお茶碗は洗わないわよ。」

これが母の口癖だ。茶碗に一粒でもお米が残っていると、母は「ちそうさまをした後でも茶碗を私に返してくる。そのたび私は

「面倒くさいなあ。」

と茶碗にこびりついてなかなか取れない一粒をいまましく思っていた。わざと大きなため息をついたり、大きな音を立てながらお米を取ったり、お米が一粒残っているくらいどうだっていいじゃんと思いつながら毎日お米を食べていた。

そんな私の態度が目にも余ったのだろう。母は次の日から私の茶碗にお米をよそわなくなった。私の前にはみそ汁とおかずのみ。母は

「お米のありがたみが分からない人には食べさせない。お米が食べたいなら、一粒一粒にどれほどの思いが込められているか考えなさい。」

と言った。お米くらい食べなくなつて別にいいやと、私はみそ汁とおかずのみを食べる生活を続けていった。

何日かして、体にある変化が起こった。ご飯を食べても、すぐにお腹が空いてポーツとするようになった。常にお腹が空いてイライラしたり、頭の回転が遅くなっているような感覚が続くようになった。そんな時に頭の中に思い浮かぶのは、のりを巻いた大きなおにぎり、トロリとした卵黄としょう油を混ぜた卵かけご飯、炊きあがったばかりの炊飯器を開けた時の匂いなど、とにかくお米のことばかりだった。パンやパスタも好きだけれど、とにかくお米が食べたくて仕方がなかった。こんなにお米のことを考えたのは初めてだったかもしれない。私の体の中にはお米を必要とするDNAがしっかりと組み込まれていることを実感し、お米を粗末にしていた自分を情けなく思った。

そんな時、幼い頃に母が話してくれたことを思い出した。

「一粒のお米には、七人の神様がいるの。土の神様と太陽の神様。風に水の神様。それに雲と虫の神様も。それと最後にお米を作ってくれた神様。『米』という漢字は八十八と書くの。これは、お百姓さんが八十八回もお世話をしやつと出来上がるからなんだよ。お米を粗末にすると神様達が怒ってしまう。だからお米を残してはいけないよ。」

母は、私が幼い頃からお米の大切さをずっと話して聞かせてくれていたのだった。私は成長と共にこの話も、母の思いも忘れてしまっていた。だからこそ、母は私がお米を粗末にしていたのを許せなかったのだろう。そして、私が自らお米のありがたさに気付くことができるよう、あえてお米を出さなかったのだ。

お米の神様の話を思い出した私は、インターネットでお米の神様に関する調べてみた。日本神話に登場するニギミノミコトという神様、稲荷神、七福神など様々な説があり地域や家庭によって違いがあるようだ。信じる人や環境によって違うというのは、色々な宗教が入り混じった日本ならではのよう思う。しかしそれだけ、日本人がお米に支えられて今日まで生きてきたということが想像でき、有意義な調べになった。

自然の恵みをたくさん受け、長い年月をかけてようやく実ったお米。作る人の愛情や熱い思い、苦労や努力が稲に宿り、私達の食卓へ運ばれていく。お米を一粒残すということは、七人の神様を捨てるということだ。今、食べているお米をもっと大切にし、一粒のお米の中に七人の神様が宿っていると考えると、よりおいしく、よりありがたく食べることが出来ると思う。これからは、茶碗の中にいる何万もの神様に感謝しながらお米を頂くと思う。